

## 南の島にワラジムシを求めて4 —種子島と屋久島—

布村 昇

富山市科学文化センター〒939-8084 富山市西中野町1-8-31

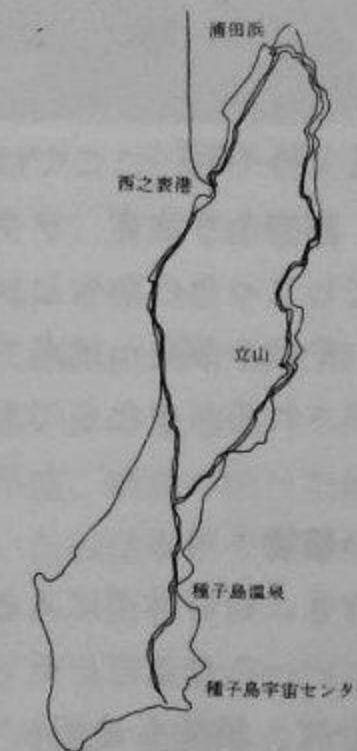
### Short Collecting Trips to the Subtropical Islands-4

Noboru Nunomura

Toyama Science Museum, Nishinakano-machi, 1-8-31, Toyama-shi, Toyama 939-8084, JAPAN

本年は採集旅行をやめ、じっとしていようとも思ったが、やはり、南の島旅行への憧れが募り、10月初め、やはり南へ出かけることにした。行き先は週末を利用して屋久島と種子島に行くことにした。大隅半島と薩摩半島まで調べているので、その先を見たいと思ったのと、30歳台に一度訪れたことがあるが、当時は海産の種類を目指して、潮間帯とシュノーケリングが主で、陸産はほとんど見ていなかったからだ。というよりは当時はまだ、ワラジムシがどの環境にいてどのように採集するかも知らなかった。

たくさんの標本ビンと連日の着替え、虫刺されや胃腸薬、仮ラベルのなど万端を整えて(たつもりで)出発。職場での仕事を午前を終え、午後の飛行機に飛び乗る。福岡空港を経由して、JRで鹿児島まで7時間弱。すっかり真っ暗な西鹿児島に着いた。



種子島

#### 種子島へ

翌朝、種子島行きの栈橋に出かける。付近の植え込みなども見るが、ここには全くワラジムシの影はなし。7時半鹿児島発の高速船で曇り空の錦江湾を南下。種子島西之表港につくと早速レンタカー会社から車を借りて、走り出す。計画では南を中心にしようと思ったが、地形を見ると南は平野がち、北は山がちであることに気づき、島の大きさと富山県の大きさを比較して、午前の適当な時間まで島の北を見ように変更した。北へとにかく走る。前の週に雨が降ったはずだが、鬱蒼とした林も既に乾いている。温度の高い場所はすぐ乾くのだろう。何度も落ち葉を取ってシフティングをした後、取りあえず、モリワラジムシが出たのを確認して、吸虫管を取り出そうとするも、なんと吸虫管が無いのだ。リュック等の荷物を何度ひっくり返しても出てこない。忘れたのだ。アレだけ、準備したつもりであったのに、一番肝心なものがない。しかもこれはどう考えても、島のよろず屋では買えそうも無いし、工夫しても作れそうもない。仕方ないので手を湿らせて取る。

次にお昼前の干潮を狙って北端付近の浦田浜でここは大きな砂浜に転石が混じり、フナムシ、ハマダンゴムシ、ヒイロワラジムシ、ハマワラジムシ等の多様な仲間が期待できる。飛沫帯に近い落葉の下に等脚類を発見、タマワラジムシだと思ったが、全てコシビロダンゴムシだ。森林の中にすんでいる属が塩分の影響を受けたところにいた。帰りに土を持ち帰ろうと再び見ると逆に飛沫帯に



種子島浦田浜海岸、逆のゾーネーションか。

いるはずのタマワラジムシがより内陸部にいた。普通は波打ち際から内陸に向かってフナムシ→ハマワラジムシ→タマワラジムシ→コシビロダンゴムシ・モリワラジムシとなるのだが、ここではフナムシ→(ハマワラジムシ帯を欠く)→コシビロダンゴムシ→タマワラジムシ→モリワラジムシとなっている。これは塩分濃度よりも湿度(湿り気)に大きく依存していることを物語っているといえよう。

ここでのサンプルを整理しようと駐車場に行くと、突然ものが見えにくくなる。老眼鏡の右のレンズを無くした。歩いた全ての採集場所に行くも発見できなかった。結構な時間を無駄にし、しかも以後片目で虫さがしをする破目になる。

地図を見て、島の東側の方が、地形が複雑そうなので、こちらを選ぶ。すれ違いができない場所を含めてくねくね道で予想外に時間がかかった。一路南に走るも時間がたつ。道を間違えて同じ道を回っていたりする。種子島の郷土料理でも食べようと思った期待は夢と消え、麺類を食べる時間もなくなった。それどころか食堂がない。やっとみつけたよろず屋でアンパンを車でかじりながら、屋久島ゆき最終便の船に間に合わせた。

#### 屋久島へ

屋久島港へつくとホテルは港のそば。めがね屋を探すも安房ではない。夕方暗くなるまで何とかワラジムシの採集を試みるも、生息の確認はできなかった。

翌朝もレンタカーを借りた。まずは屋久島といえは標高の高さが売りもの。海岸林にはワラジム



屋久島

シが多いそうであるけれど、先に少し高い場所へ行こうと永田林道を登る。初めは広い道であったが、だんだん狭くなり、片側通行の細さ。一つ間違うと谷底にまっさかさまだ。

#### ヤクザルに乗っ取られる

標高 500 m を越す地点でヤクザルの母子集団にあう。車の前、数分で毛づくろいをしている。小猿はまだ小さい。クラクションを鳴らしても、降りて行っても一向に平気だ。仕方無しに待つ。やがて少し左に動いて車の通れる幅ができたので、通りぬけ、やれやれと思い 300 メートルほど行くと、今度はオスザルが出現、車に飛び乗ってくる。フロントガラスにしがみつく。横から、再度ミラーをがらがんゆさぶる。横から入ろうとする。全てだめだと悟ると後ろに回る。何とか車に入ってえさを取ろうとするのだろうか。カーブで安全なところで降りるすべも知っているという。ヒッチハイクなのだ。ひょっとしたら車をゆするのは「早く車を出せ」というしぐさだったのかもしれない。しかし、やはり本当はエサをくれという合図だという。荒川三又まで行くも、ここでは全くワラジムシが獲れない。高く上りすぎ、ワラジムシのいるゾーンを超えてしまったのかもしれない。ここで、引き換えし、やはり 500 m 地点で例のオスザルに再び車を占拠される。またしても、時間を費やしてしまった。

#### 白谷のたくましい植物

次に島の北へ行き、白谷林道に入る。これまた景色が良いが、たいへんな道だ。そして、いたる所で工事をしている、舗装も途切れているので、ひきかえすことにした。ここでもモリワラジムシ



車に乗っ取ろうとするヤクザル

が多く取れた。海岸付近の湿った森にしかいないと思ったが、林道の脇にも好湿の種類がいた。そしてふと、コンクリートの壁面を見上げるとびっくりした。土のまったく無い垂直の壁面に根ごと貼りついて生きている植物を見た。湿り気があるから薄いコケ層があったもののシダも同様に生きているのでびっくりした。いずれにしても多湿がこのような芸当を可能にしたのだろう。



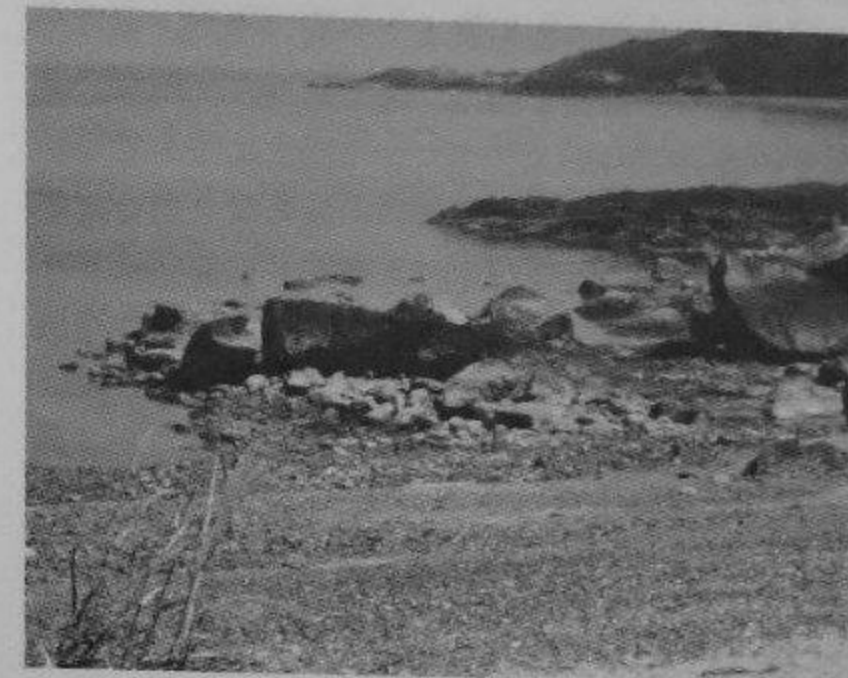
コンクリートの壁面に貼りついた植物

#### 一湊(いっそう) 海岸での観察

さらに北海岸を西に走り、ガジュマル林を抜け、一湊の岩礁に出た。20 年ほど前、日射病になり、倒れた苦い思い出の土地だ。

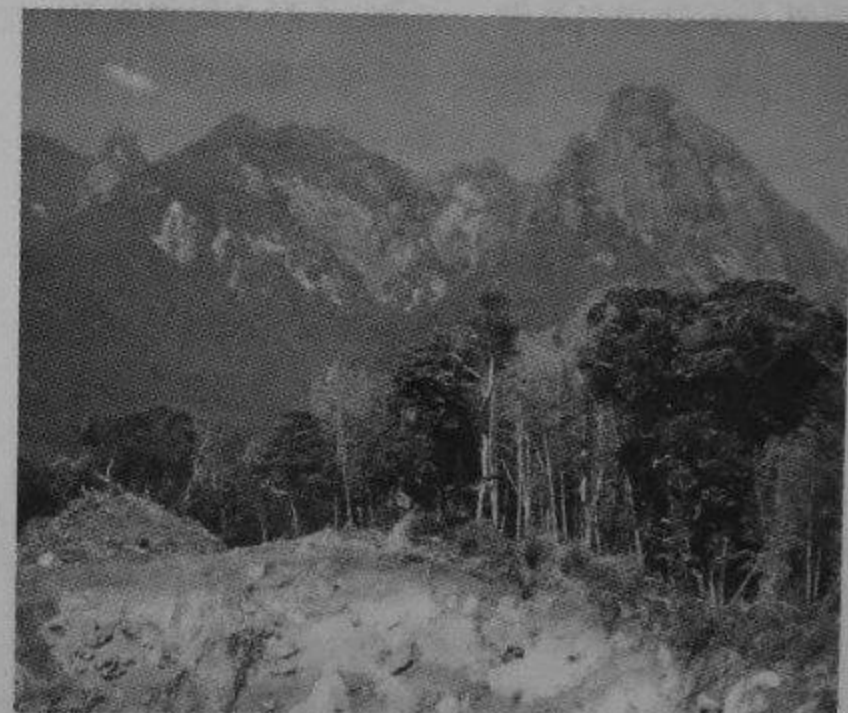
ここでも早速、断崖の湿った場所を探す。フナムシと共にいたのは本州や九州本土であればヒイロワラジムシかタマワラジムシであるが、なんとここでもモリワラジムシがいた。本来のハビタットとは考えられない乾燥した環境であるが、このニッチェが空いていたため、生息範囲が広がっ

たと言えるのか。これも島嶼特有の現象といえるかも知らない。



一湊海岸の様子

西部林道は走行困難とレンタカー屋さんに告げられていたので、ひき返し、南の尾ノ間方面へと走る。収穫物は大きく変化が無かったが、景色は抜群であった。



屋久島の南側、尾ノ間から

荷物を整理してツルグレン装置用の土を送ろうとしたが土曜日だ。30 度ほどの店先に 2 日も置かれては、危ないと思い、日曜もやっている店を漸く探す。これで、あとはレンタカーの返却だけだと思い、空港横のスタンドでガソリンを満タンにし、空港に戻るが、レンタカー屋に何度電話をしても通じない。飛行機の時間は迫ってくるのに、レンタカーの鍵を握ったまま、あせる。とにかくレンタカー屋へ店に走る。おじさんがいて、「電話の電波が届かないの。ごめん、ごめん」と長閑

のものだ。でも何とかJACのYS飛行機にのり、鹿児島空港へ到着した。

翌日の午後の名古屋便までの間、また、レンタカーを借り、霧島を回る。前にたった一頭しか採れていない幻のヒメフナムシに出会えるかもしれないと思ってからだ。小雨の中落ち葉を振るっていると「また、何をしているのか」と興味深そうなおじさんがやってくる。ひとしきり説明し採取

を行う。再び鹿児島県へ戻ろうとするも土砂降りの高千穂峰で道迷い、硫黄谷の温泉につかり、再び土砂降りになった道を鹿児島空港に戻る。途中でまた抽出用の土を送った。

富山に帰って、疲れているはずなのに、今度はどこの島へ行こうかなと地図を見るあさましさである。

## 平成 14 年度第 3 回野外研修会報告

若林一成

日時：平成 14 年 11 月 4 日（月）振替休日 午前 10 時～午後 3 時

場所：氷見市の巨木・名木(天然記念物等)めぐり  
天気：雨

### 1. JR 氷見線終点到 AM 10:00 集合する。

参加者 増田・本多、若林、中川、地元の案内人の各氏 計 5 名 本瀬氏は少し遅れ合流できなかった。また、強い風と雨で参加者が少なかった。

### 2. 氷見市海浜植物園

最初に氷見市海浜植物園にいき、中川氏より氷見市の天然記念物(樹木)の概要と問題点の説明を受ける。

### 3. 上日寺国指定文化財・天然記念物「上日寺のイチョウ」朝日本町上日寺

真言宗の上日寺の境内にあるこの大イチョウは雌株で樹勢なお衰えず、10 月末頃多くの実を結ぶという。1000 年もの実がなる。

樹齢は古く、白鳳 10 年(691)当時、創建の際、観音菩薩を安置し、その霊木として、この樹木が植えられと伝えられる。樹齢約 1300 年にもなる巨木である。目通幹周 12 m、樹高約 24 m、イチョウの木は怪物である。

気根(乳柱)：地上 3～5 m のあたりから、大小数十本の気根が垂れ下がっている。気根の発生は局部に養分の過剰が起こるためであると案内板に説明されていた。

郷土の俳人「霞峰」の句碑「清水ありしかのみならず大銀杏」がある。

確かにすぐそばに水を満々と湛え、コウホネなどの水生植物が群生する大きな池があった。この池の水が涸れた時、このイチョウが弱ったという。その裏手は樹木の繁茂する丘陵地である。丘陵地一帯が真言宗朝日山観音霊場上日寺を中心とたくさん大小の精舎(社)があり、石仏群や墓石もあった。当初寺内に西国 33 番札所の霊場を設けたくらいであった。いかにも万物の精霊が宿る感じである。閻魔様堂もあった。

### 4. 阿尾城跡 県指定文化財・史跡

海に長く突き出た岬の、細長い崖の上の小丘陵にある「平山城」である。最も高い所の「白峰社」も海拔は 38 m、最も奥まった鎮守の榊葉平布神社がある所で、海拔 22 m である。戦国時代には氷見の北半を領めた菊池氏の居城であった。市民の散策路として整備されているが、崖縁には暖温帯の海浜植物が見られ、味わい深い自然である。しかも海が見渡せる絶景である。唐島が海の中に美しく、立山連峰がはるか美しく見えた。海には定置網が見られた。

### 5. 富山県指定の天然記念物「長坂不動の大つばき」

僧ヶ岳にはユキツバキ、愛本あたりにはユキバタツバキそしてこの石動山の表参道の長坂にはヤブツバキがある。このヤブツバキは暖地性常緑広葉樹で、花は赤色の五弁花で、11 月から翌年の 5 月まで咲き続け、特に花が多く咲く時期が 3 度もあるので、「三度咲きつばき」といわれている。

目通幹周りは 1.95 m、樹高は約 11 m、樹齢約 400 年の巨樹である。ツバキは成長が遅く、なかなか大きにならない樹木である。

この樹木の根元に清泉が湧出していたので、不動明王をまつた「剣社」を建てた。そしてこのツバキが神木として崇敬された。しかし、今は木はそのままだが、祠もなく、また、すぐそばに高く大きな道路が出来、その陰になっている。

### 6. 富山県指定の天然記念物「長坂の大いぬぐす」

「長坂の大いぬぐす」：植物名クスノキ科タブノキ。万葉集にのっている大伴家持の詠んだ「磯の上の都万麻を見れば根を延べて年深からし神さびにけり」。推定樹齢 500 年、目通し幹まわり 6.91 m 樹高約 12 m 地上約 2.5 m の高さで 8 本に分かれ、枝葉を広げている。暖地性常緑樹のこの大イヌグスは樹勢は旺盛である。しかし、根元の太い幹はくさって樹皮ははげ、防腐剤の塗料がぬらされている。長く伸びた太い枝の下には支柱が立てられている。

この付近の人は新田開発の功労者源内が神木として信仰していたので、諏訪の大神「産土神」として保護した。そして今も 1 本のイヌグスで見事な一つの森を作っている。イチョウは気根をさげるが、このクスノキはこぶを作っている。